

「こんにちは！ご隠居さんいますかね」「おう。誰かと思ったら八つつあんかい」
この二人の台詞をどれだけ稽古させられたことでしょうか。

この台詞を発する時に、噺家が表現することは、

- ・それぞれの年齢、性格、人物像
- ・二人の距離感
- ・二人の関係性

です。これらが、台詞一つに全て込められていなければなりません。それらがなくては冒頭の台詞をただ発しても、落語の世界を表現することはできないのです。ですから我々噺家は、「一言に全てを込めろ」と教えられ、どの噺のどの台詞も、ただ喋る訳ではなく、場と人物のバックグラウンドを全て込めて一つ一つのシーンを演じられるように稽古を積んでいきます。

高座には舞台装置も音響も小道具も何もなく、あるのは噺家の身一つと、扇子と手拭いだけです。究極の省略の中で、無限に広がる江戸の世界を表現していくのが落語という芸能です。

その修業時代も同じです。修業中の前座に許される台詞はほんの数語。「おはようございます」「はい」「ありがとうございます」「すみません」「わかりません」「いただきます」「ごちそうさまでした」。その言い方一つで、相手に全てを伝えなければいけません。無駄なお喋りを許される立場にない修業中の前座は、こうしたたった一言で、言われた相手が心持ちが良くなるように言葉を発しなくてははいけないのです。

修業時代、朝寝床から起きてきた師匠に最初に会うのは前座の私でした。師匠から、「お前の『おはようございます』が俺の一日を決める。俺が一日を気持ち良く送れるような『おはようございます』を言うように」と言われ、何百回も「おはようございます」の稽古をつけられました。気持ちのいい「おはようございます」が言えるようになると、「お前の『おはようございます』はいつも一緒だ。挨拶一つにも無限の表現方法があるだろう。相手の状況で変わるだろう。師匠がまだ眠そうだ、とか、師匠は今日は早くから仕事だ、とか、師匠は何か考え事している、とか、色々あるだろう。言葉一つの言い回しも、数多の表現方法があることを考えて話すんだ」と教わりました。こうした教えが全て、落語にも繋がっていくのです。

このように、言葉一つを発する大切さを学び続けている我々噺家が、高座をどのように勤めているか、これから実際に落語を聴いて頂き感じて頂きたいと思います。それでは一席お付き合いをお願いいたします。